

令和 2 年 9 月 14 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12364

研究課題名(和文)被災地域の言語文化復興に向けた取り組みの理論と実践に関する統合的研究

研究課題名(英文) Integrated Study of the theory and practice for the revitalization of the language culture in the disaster-stricken area.

研究代表者

大野 眞男(OONO, Makio)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：30160584

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災とそれに伴う津波の被災地である岩手県下の沿岸地域において、方言による言語文化の活性化を通じて、被災地の文化・社会を活性化するための理論と実践の統合的研究を遂行した。具体的には、国内外の社会言語学の先行研究を踏まえた被災地復興のための言語文化活性化の理論と方法論の構築、被災地に埋もれていた方言による言語文化資料の発掘と学習材化を通じた一般市民への提供、方言使用の場面の維持・拡大を目的とした一般市民対象の「方言で昔話を語る会」の開催等を行った。最終的な研究成果として、2019年度日本語学会秋季大会シンポジウムにおいて「言語の記述・観察から言葉の生態学へ」と題する依頼講演を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、言語研究者が被災地の文化復興を地域方言の活性化を通して実現していく際の理論構築を、内外の社会言語学・言語人類学等の動向を踏まえて模索することであり、その成果は2019年度日本語学会秋季大会シンポジウムにおいて「言語の記述・観察から言葉の生態学へ 危機方言の活性化支援活動を通して」として報告した。また、社会的意義については、地域の協力者・自治体と連携して方言昔話を語る活動を多面的・継続的に実践した結果、地域に協働的活動拠点を形成することができた。方言復興に関する理論と実践の往還を重ねて、言語生態学的研究と社会貢献活動とを繋ぐ言語研究者の新たな社会的立場を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：The integrated study between the theory and practice for the revitalization of the language culture in the tsunami-stricken area of Iwate coastal regions has been carried out through the enlivenment of the dialect activity. To explain concretely, we have tried to achieve the goal in the following three spheres. First, the construction of the theory and methodology to revitalize the linguistic culture of the tsunami-stricken areas. Second, the excavation of the buried dialectal materials and the re-making some kinds of learning materials based on them for the sake of the lay citizens in the areas. Third, the hosting of the annual event "Let's tell the folk-tales in our dialect" with the intention to maintain and enhance the sustainability of the dialect in the areas. The total result of this study was reported under the title of "From the description and observation of language to the language ecology" at the annual meeting of the Society for Japanese Linguistics held at november 2019.

研究分野：日本語学

キーワード：方言復興 方言学習材 被災地の言語文化

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 東日本大震災で被災した岩手県沿岸部地域は、震災以前においても社会経済的要因によって都市部への人口流出に恒常的に苦しめられてきた、いわゆる「過疎地」でもあった。そのような地域経済・文化の衰退状況の中で、震災と津波という物理的災厄が襲いかかることによって、地域コミュニティはその基盤から危機的な状況に置かれることとなった。言語には広範囲な場面で情報を伝達する機能がある一方で、自らが所属する社会的組織の種々のアイデンティティを表出し共有する機能をも強く持っている。特に、地域アイデンティティと地域方言との間には強固な関係性が確認でき、被災直後の瓦礫の中から「がんばっぺし、釜石」「なじょにかすっぺし、陸前高田」といった方言メッセージが自然発生的に生まれてきたことは、復興に果たす言語文化の機能が小さくないことを物語っていた。

(2) 言語文化復興の理論と実践は日本では未発達であったが、グローバルな言語絶滅の危機の中で、海外では 1990 年代以降に多くの研究が行われるようになってきている。たとえば、J. Fishman(1991)は段階別世代間崩壊尺度による危機的状況の把握と、その後の復興支援の在り方のモデルを構築している。また、UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages (2003)による研究も、衰退する少数言語の復興支援を前提とした危機尺度測定のモデルであり、さらに多様な言語復興支援研究へと発展している。日本国内的では、ユネスコによる消滅危機言語として日本語諸方言が指定されたことを受けて、国立国語研究所を中心とした復興支援の取り組みが主として奄美・沖縄方言を対象に開始されたばかりであった。

### 2. 研究の目的

東日本大震災とそれに伴う津波の被災地である岩手県下の沿岸地域において、方言による言語文化の活性化を通じて、被災地の文化・社会を活性化するための理論と実践の統合的研究を遂行することを目的とした。具体的には、国内外の社会言語学の先行研究を踏まえた被災地復興のための言語文化活性化の理論と方法論の構築、被災地に埋もれていた方言による言語文化資料の発掘と学習材化を通じた一般市民への学習材提供、方言使用の場面の維持・拡大を目的とした一般市民対象の「方言で昔話を語る会」の開催等を通じて、地域方言と地域アイデンティティの絆を強化していくことであった。これらの具体的活動を通じて、方言復興に関する理論と実践の往還を重ねることで、言語生態学的研究と社会貢献活動とを繋ぐ言語研究者の新たな社会的立場を明らかにすることが最終的な目標であった。

### 3. 研究の方法

方言復興に関する理論と実践の往還を重ねることが方法論上の特色であった。具体的には、大野眞男・小林隆編『方言を伝える』(平成 27 年 5 月)において提示した 3 段階の支援活動(研究者ではない一般の人にも利用可能な地域方言に関する情報整備、若い世代を含めて一般市民の方が地域方言にアクセス可能となるような学習材の作成・開発、方言を使って交流する社会的場面の維持・拡大・創出)を展開することで、方言の維持・継承のための素地を構築する。このような実践活動を踏まえて、地域の言語共同体の価値観と深く結びついた方言に対する意識の転換・威信付けを行うと同時に、欧米で積極的に実践されている少数言語・方言の復興に関する諸理論との擦り合わせを行い、日本における方言・少数言語復興のためのモデルを構築しようとする点に研究上の特色があった。

### 4. 研究成果

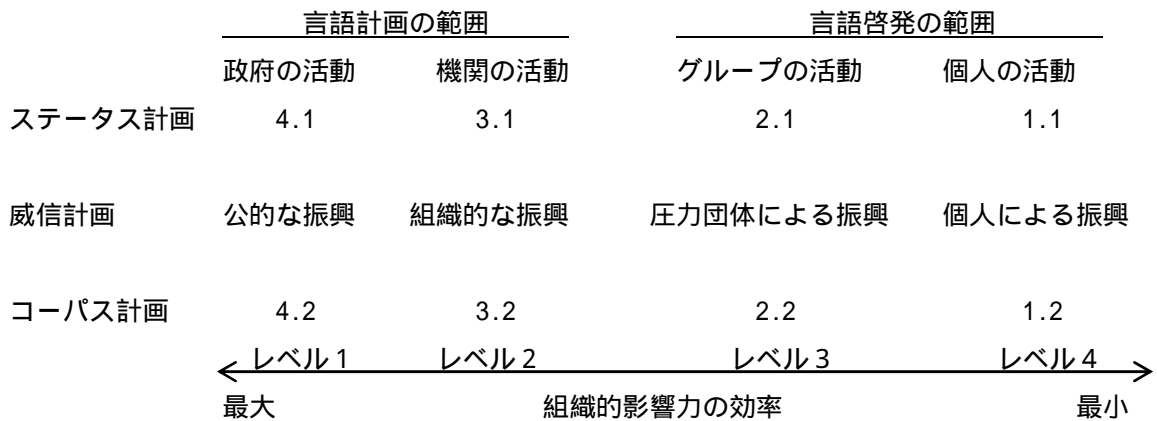
(1) 東日本大震災の被災地としての岩手県域における方言に関する情報整備としては、これまで埋もれた状態で顧みられることのなかった膨大な方言資料群である、昭和初期の「岩手県郷土教育資料」(岩手県立図書館蔵・小松代融一氏旧蔵分)に現れる方言語形と意味記述のデータベースを完成した。加えて明治期の「音韻口語法取調」第二次調査稿本のうち所在不明であった稗貫郡部分を含めた方言関係資料群(杉村松之助氏旧蔵)を発掘し、小島千裕氏を研究協力者として電子資料化を行った。さらに津波被災地である沿岸部方言に関しては、入手が極めて困難である伊藤麟市氏『宮古の方言と敬語』、岩手大学教育学部日本語学研究室『山田ことば辞典』、牧原登氏『岩手県下閉伊郡田野畑村大芦のことばとその周辺』の方言資料の電子データ化を行った。また、明治期から昭和期の方言資料群の整理の過程の副産物として、宮沢賢治作品の方言表記の工夫を解明する資料の存在を発見したことから、宮沢賢治関係機関誌に報告した。

(2) 若年層世代を含めて一般市民がアクセス可能な方言学習材の作成・開発としては、文化庁「各地方言談話収集緊急調査」の一環として昭和55~57年に実施された宮古市金浜方言の談話資料について、未公開のまま放置されていたことから、当時の現地採録者である宮古市も宮古市元教育長の坂口忠氏との協同作業としてデータCD集『よみがえる三陸金浜のことば 昭和の方言談話資料』2巻(データCD2枚 waveファイル時間:624分20秒:pdfファイル枚数736頁分 + データCD2枚 waveファイル時間:514分55秒:pdfファイル枚数656頁分)を刊行し、津波で甚大な被害を被った金浜集落の言語生活の一端を残すことができた。また、昔話を方言で語る「釜石漁火の会」と協働して、釜石地域で伝承されてきた16の昔話を『釜石漁火の会が語る・故郷の昔話』としてまとめることができた。この成果物は、次世代を担う子どもを読者として想定し、イラストや言語地図などを盛り込んで子どもにも読みやすい配慮を加え、市教育委員会を通じて地域の小学校に配布し、釜石の言語文化資産の次世代継承のための学習材としての活用を可能とした。また、宮古市田老地区に所在する中学校生徒による方言劇づくりの参考として、「岩手県郷土教育資料」等から田老方言を抽出した資料集を作成し、関連する授業や方言指導を行った。

(3) 方言を使って交流する社会的場面の維持・拡大・創出の活動としては、方言で昔話を語る釜石市の市民グループ「漁火の会」と連携し、復興住宅・小学校・学童クラブなどで方言昔話を語る会の継続的活動を一貫して行うことによって被災地の言語文化復興を実質的に支援し、最終年度には三陸鉄道全通を記念して岩手県が企画した「三陸防災復興プロジェクト」の一環として開催された「おらほの話っこ、聞いてください(私たちの昔話を聞いてください)」(釜石市主催、令和元年7~8月に5回実施)の開催協力を行った。また、宮古市田老地区の中学校の方言劇活動(平成28年~令和元年)を演劇関係者と連携して支援した。

(4) 方言の復興に関する内外の諸理論との擦り合わせと方言復興のためのモデル構築としては、主としてアメリカの社会言語学・言語人類学の動向に着目し、方言や少数言語の持っている機能としてアイデンティティー表出機能に注目した言語文化復興モデルの構築を模索した。それらを踏まえて、「おらほ弁で語っぺしプロジェクトの報告」日本方言研究会(2017年)、「言語・文化を切り口に災害文化を考える」災害文化研究会(2017年)、「岩手県沿岸部被災地の小・中学校における方言理解教育の支援実践」実践方言研究会(2018年)で被災地の言語文化復興の理論と実践に関する報告を行い、「東日本大震災から8年(指定討論者)」災害文化研究会(2019年)の発表・報告を行った。最終2019年度には日本語学会秋季大会シンポジウム「社会変動の

中の日本語研究「学」の樹立と展開」において「言語の記述・観察から言葉の生態学へ 危機言語の活性化支援活動を通して」と題する招待講演を行い、ステータス計画とコーパス計画から構成される一般の言語計画に対して、方言・少数言語に威信 prestige を付与する威信計画（H. Haarman(1990)による）を加えたモデルを今後の国語計画（下図）として実現していく必要性を提唱した。



講演内容は『日本語学会 2019 年度秋季大会予稿集』 pp254-258 に掲載され、併せて発表要旨が日本語学会機関誌『日本語の研究』第 16 巻 1 号（2020 年 4 月 1 日発行）にシンポジウム報告として掲載された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大野眞男	4. 巻 2
2. 論文標題 災害時に言語研究者ができる支援 方言の力強さに学ぶ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害文化	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大野眞男・竹田晃子	4. 巻 第4輯
2. 論文標題 宮澤賢治による方言表記の工夫と地域に根ざした国語観	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 賢治学	6. 最初と最後の頁 44-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹田晃子	4. 巻 173
2. 論文標題 災害時のコミュニケーション：日本語教育と方言研究の連携のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹田晃子・小林隆・今村かほる・大野眞男・杉本妙子・東北大学方言研究センター	4. 巻 6
2. 論文標題 小林好日博士と東北方言調査の資料、東日本大震災における方言をめぐる活動の状況	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 149-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大野眞男・竹田晃子・小島聡子
2. 発表標題 岩手県沿岸被災地の小・中学校における方言理解教育の支援
3. 学会等名 実践方言研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野眞男
2. 発表標題 パネルディスカッション「東日本大震災から8年」（指定討論者）
3. 学会等名 災害文化研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大野眞男・竹田晃子・小島聡子
2. 発表標題 おらほ弁で語っぺしプロジェクトの報告
3. 学会等名 日本方言研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大野眞男
2. 発表標題 言葉・文化を切り口に災害文化を考える
3. 学会等名 災害文化研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野眞男
2. 発表標題 言語の記述・観察から言葉の生態学へ 危機方言の活性化支援活動を通して
3. 学会等名 日本語学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 大野眞男・竹田晃子・小島聡子（分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 162 176
3. 書名 シリーズ日本語の語彙8 方言の語彙 日本語を彩る地域語の世界（担当部分 第12章「方言語彙の継承と教育」）	

1. 著者名 竹田晃子・坂口忠・小島聡子・大野眞男	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩手大学教育学部日本語学研究室（科学研究費成果刊行物）	5. 総ページ数 wavファイル時間長：624分20秒・pdf ファイル文字起こし頁数：736頁
3. 書名 よみがえる三陸金浜のことば 昭和の方言談話資料 4（データDVD 2枚）	

1. 著者名 竹田晃子・坂口忠・小島聡子・大野眞男	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩手大学教育学部日本語学研究室（科学研究費成果刊行物）	5. 総ページ数 wavファイル時間長：514分55秒・pdf ファイル文字起こし頁数：656頁
3. 書名 よみがえる三陸金浜のことば 昭和の方言談話資料 5（データDVD 2枚）	

1. 著者名 竹田晃子 (有田節子編・分担執筆)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 213-238
3. 書名 日本語条件文の諸相 地理的変異と歴史的変遷 (担当部分「東北方言の認識的条件文」)	

1. 著者名 大野眞男・竹田晃子・小島聡子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩手大学教育学部日本語学研究室	5. 総ページ数 145
3. 書名 釜石漁火の会があらほ弁で語る ふるさとの昔話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	小島 聡子  (KOJIMA Satoko)  (70306249)	岩手大学・人文社会科学部・准教授   (11201)	
研究 分担者	竹田 晃子  (TAKEDA Kouko)  (60423993)	立命館大学・衣笠総合研究機構・専門研究員   (34315)	
研究 協力者	小島 千裕  (KOJIMA Chihiro)		